様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００００３５

研究課題名（和文）言語諸科学における意味概念の体系化：総合的な言語科学の創出に向けて

研究課題名（英文）Systematization of the Concepts of Meaning in Linguistic Sciences: Toward Comprehensive Linguistic Science

研究代表者
藤川　直也（Fujikawa, Naoya）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：４０７４９４１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：言語に関する現代の科学的探求は多岐にわたる。それは心理学・生物学的アプローチと数理的アプローチとに大別できるが、それぞれのアプローチにおいては、方法論的な違いのみならず、「意味」のような基礎概念について分野間で相違が存在し、分野をまたぐ共同作業の妨げとなってきた。本研究ではそうした意味概念の多様性を包括的に扱う視座として、計算としての意味という観点が有用であることを示し、言語能力についての心理学としての意味論の中での形式意味論の位置付けを明確化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、言語科学における意味概念に関する原理的なレベルでの対立（内在主義と外在主義）が調停可能であるということを計算としての意味という観点から明らかにし、認知心理言語学と形式意味論（特にモデル論的意味論）とをつなぐ学際研究の基礎となる哲学的・概念的基盤を整備した。さらにそれにもとづいた具体的な展開として、自閉スペクトラム症(ASD)の学習・認知様式と、形式意味論が記述する意味論的普遍性の関連についての実証的研究を進めたが、今後この基盤をもとに両分野にまたがるさらなる研究の展開が期待される。

研究成果の概要（英文）：The contemporary linguistic sciences are diverse and can be broadly classified into the psychological/biological approach and the mathematical approach. There are not only methodological differences but also differences in basic concepts such as "meaning" among those approaches, which have hindered interdisciplinary collaboration. In this study, we showed that the viewpoint of meaning as computation is useful as a perspective that comprehensively deals with the diversity of the concepts of meaning, and, in particular, clarified the position of formal semantics in the psychological research of human semantic ability.

研究分野：哲学

キーワード：言語哲学　メタ意味論　モデル論的意味論　認知心理言語学　意味論的普遍性　自閉スペクトラム症

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

言語に関する現代の科学的探求は多岐にわたる。それは心理学・生物学的アプローチ（生成言語学、心理言語学、言語認知神経科学、進化言語学など）と数理的アプローチ（形式意味論、計算言語学、自然言語処理など）とに大別できるが、それぞれのアプローチにおいては、方法論的な違いのみならず、「意味」のような基礎概念の理解においても食い違いが見られる。現代の言語的意味に関する科学的探求においては、研究分野ごとに異なる意味概念が用いられ、説明の対象となる現象についても分野間でときに相違が存在する。こうした意味概念の多様性は、意味についての経験科学の全体像を見えにくくし、分野間の共同研究にとって障壁となってきた。さらに、心理学および認知神経科学系の言語科学と自然言語形式意味論とでは、こうした実践的なレベルでの意味概念の相違に加えて、意味についての原理的なレベルでの考え方の対立があると考えられている。前者における意味の内在主義によれば、言語的意味は言語使用者の頭の中にある。これに対して後者における意味の外在主義によれば、言語的意味は言語使用者の頭の中にはない。こうした原理的なレベルでの対立は、分野間の交流の大きな妨げとなっている。このように、意味に関する現代の言語科学においては、実践的なレベルと原理的なレベルの両方において、意味の理解について分野間で齟齬が生じている。そのため意味についての多様な科学的探求の成果を位置付け俯瞰するための総合的な視点の提示が重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、言語諸科学の分野をまたぐ学際研究を可能にする哲学的・概念的基盤を整備し、総合的な言語科学の礎を築くことにある。特に自然言語形式意味論および言語認知神経科学・心理言語学に注目し、それらにおける意味概念の多様性を包括的に扱う体系的意味理論を提示する。さらにこの意味理論に基づいて、形式意味論と言語認知神経科学・心理言語学が共同する新たな研究分野を提案する。

３．研究の方法

内在主義と外在主義の対立という原理的なレベルでの対立を調停し、実践的なレベルでの意味概念の多様性を包括する体系的な意味理論を提示するための方法として、言語能力についての心理学としての意味論の中での形式意味論の位置付けを明らかにすることを試みる。とりわけ、形式意味論が意味として措定する言語外の存在者が、言語能力とどのように関係するのかを考察する。以上を踏まえ、形式意味論と言語認知神経科学・心理言語学が共同する新たな研究分野として、言語獲得と言語障害に関する認知経科学的な知見を形式意味論の理論構築に反映した研究分野の提案を試みる。

４．研究成果

内在主義の背景は、言語学は言語能力についての心理学であるというチョムスキー的な見解にある。他方で外在主義は、言語表現と言語外の存在者である意味論的値とのマッピングを意味論の主要な一部とするモンタギュー的なモデル論的意味論の哲学的な背景となってきた。そこで、従来非心理学的な意味論の代表格と目されてきたモデル論的意味論における意味概念と、それに対する心理学的な言語理論からの反論についての研究を集中的に行った。その結果、次の点が明らかになった。(i) モデル論的意味論が表現に割り当てる意味論的値は、従来考えられてきたようにその表現が表す外界の事物（の数理的なモデル）だと理解する必要はない。(ii) ある表現の意味論的値はその表現にコードされた心理的な意味計算規則のモデルとして理解できる。得られた研究成果は、Fujikawa, N. `In What Sense is Model Theoretic Semantics a Theory of Meaning?' (*Analytic Philosophy Workshop*, Yonsei University, 2019)、Fujikawa, N. `What Model-Theoretic Semantics Can Do' (*Nanzan Workshop on the Foundational Issues in Linguistics and Philosophy of Language*, Nanzan University, 2019)において報告された。

これらの研究を踏まえ、モデル論的意味論における表示を心理的な意味計算のモデルとみなす計算論的な見方のもと、モデル論的意味論を用いて記述される意味論的な普遍的特性(semantic universal)についての心理学的な探求に着目し研究を進めた。ここでの研究成果を公表するため、ワークショップ「自然言語の形式意味論と心理学」（科学基礎論学会 2020 年度秋の研究例会）を開催した。そこでは、意味研究における実験的手法、意味論的な普遍的特性の学習可能性の観点からみたモデル論的意味論と心理言語学の接続、自閉スペクトラム症(ASD)の学習・認知様式と、個人差から見た言語の普遍性の問題が焦点となった。この研究により、自閉スペクトラム症(ASD)の認知様式の特異性と意味論普遍的特性との関連を検討するという課題が浮かび上がった。そこで ASD と言語使用・理解の関連に関する実証的な心理学的研究を進めた。先行研究の調査から、ASD と言語使用・理解に関しては語用論の分野での研究が中心的であり、意味論、統語論分野との関連に関する研究が手薄であることがわかった。こうした状況を踏まえ、日本語再帰代名詞の理解と自閉症的特性との関係について、 ウェブベースでの質問紙調査に基づく研究を行なった。その成果の一部は、和泉悠・藤川直也・橋本龍一郎「自閉症的特性と日本語再帰

代名詞理解の関係について」(2021 年度比較統語論ワークショップ、南山大学、2022 年)において発表された。

本研究では、これら言語科学における意味概念についてのメタ意味論を中心としつつ、その議論をさらに深化させるため、その方法論的基礎である概念工学、そして、意味概念についてのより基礎理論的な言語哲学的考察へと研究が進んだ。これらの研究により、分析哲学における幾つかの哲学方法論を整理した上で概念工学がその新たな方法論の一つとして位置付けられるということ、とりわけコミュニケーションにおける意味概念の解明においてコミットメントが中心的な役割をもつことが明らかになった。これらの成果は、鈴木貴之「分析哲学における新たな哲学的方法論の可能性」(『哲学雑誌』, 136 巻, 2022 年)、三木那由他 『話し手の意味の心理性と公共性』(勁草書房, 2019 年）などで発表された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 鈴木貴之	４．巻 136
２．論文標題 分析哲学における新たな哲学方法論の可能性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 哲学雑誌	６．最初と最後の頁 24-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 和泉悠	４．巻 51:1
２．論文標題 言語哲学におけるいくつかのトレンド	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 188-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nayuta MIki	４．巻 8(1)
２．論文標題 Concessive Joint Action: A New Concept in Theories of Joint Action	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Social Ontology	６．最初と最後の頁 24-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.25365/jso-2022-7307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三木那由他	４．巻 24
２．論文標題 推意・意味・意図: グライスにおける推意	５．発行年 2023年
３．雑誌名 語用論研究	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三木那由他	4．巻 50
2．論文標題 共同行為のミニマリズム	5．発行年 2023年
3．雑誌名 哲学の探究	6．最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三木那由他	4．巻 49
2．論文標題 会話の格率の三つの破りかた：行為の理論としての会話的推意の理論	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『科学基礎論研究』	6．最初と最後の頁 33～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4288/kisoron.49.1_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三木 那由他、Miki Nayuta、ミキ ナユタ	4．巻 62
2．論文標題 言い抜け可能性と取り消し可能性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	6．最初と最後の頁 1～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87417	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 呉羽真・小草泰・藤川直也	4．巻 -
2．論文標題 「知覚はプロジェクションか？―認知科学者のための知覚の哲学入門―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本認知科学会第36回大会発表論文集	6．最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Park, E. & Homae, F	4．巻 -
2．論文標題 Effect of overt speech on lexical-semantic processes during picture naming	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本認知科学会第36回大会発表論文集	6．最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三木那由他	4．巻 52(1)
2．論文標題 意図の無限後退問題とは何だったのか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 科学哲学	6．最初と最後の頁 47-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 和泉悠・藤川直也・橋本龍一郎
2．発表標題 自閉症的特性と日本語再帰代名詞理解の関係について（Autism Spectrum Disorders and Japanese Reflexive Pronouns）
3．学会等名 Comparative Syntax Workshop 2021～2022 2021年度比較統語論ワークショップ
4．発表年 2022年

1．発表者名 三木那由他
2．発表標題 譲歩的共同行為
3．学会等名 日本科学哲学会第54回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 推意・意味・意図：グライス哲学における推意
３．学会等名 日本語用論学会第24回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 「意味する」とはいかなる行為か
３．学会等名 ワークショップ「発話行為の言語学と言語哲学」
４．発表年 2022年

１．発表者名 橋本龍一郎
２．発表標題 自閉症の学習・認知様式:個人差からみた言語の普遍性
３．学会等名 科学基礎論学会2020年度秋の研究例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤川直也
２．発表標題 semantic universalと学習可能性
３．学会等名 科学基礎論学会2020年度秋の研究例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤川直也
２．発表標題 公共性のありかを探り意味と意図の関係を再考する
３．学会等名 科学基礎論学会2020年度講演会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Horiguchi, Y. & Homae, F.
２．発表標題 Checking lexical relation between verbs and objects required for the processing of case information: An ERP study
３．学会等名 The twelfth meeting of the Society for the Neurobiology of Language（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 共同的な営みとしてのコミュニケーション
３．学会等名 科学基礎論学会2020年度講演会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Miki, N.
２．発表標題 Ad-lib Joint Action
３．学会等名 The 12th Biennial Collective Intentionality Conference International Social Ontology Society（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Park, E. & Homae, F.
２．発表標題 Effect of overt speech on lexical-semantic processes during picture naming
３．学会等名 日本認知科学会第36回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 呉羽真・小草泰・藤川直也
２．発表標題 知覚はプロジェクションか？―認知科学者のための知覚の哲学入門―
３．学会等名 日本認知科学会第36回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fujikawa, N.
２．発表標題 In What Sense is Model Theoretic Semantics a Theory of Meaning?
３．学会等名 Analytic Philosophy Workshop（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fujikawa, N.
２．発表標題 What model-theoretic semantics can do
３．学会等名 Nanzan Workshop on the Foundational Issues in Linguistics and Philosophy of Language（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

1．著者名 三木　那由他	4．発行年 2022年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 344
3．書名 グライス 理性の哲学	

1．著者名 ロバート・ブランダム、加藤　隆文、田中　凌、朱　喜哲、三木　那由他	4．発行年 2020年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 224
3．書名 プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか　上巻	

1．著者名 ロバート・ブランダム、加藤　隆文、田中　凌、朱　喜哲、三木　那由他	4．発行年 2020年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 256
3．書名 プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか　下巻	

1．著者名 三木　那由他	4．発行年 2019年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 304
3．書名 話し手の意味の心理性と公共性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	橋本　龍一郎 (Hashimoto Ryu-ichiro) (00585838)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	鈴木　貴之 (Suzuki Takayuki) (20434607)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	保前　文高 (Homae Fumitaka) (20533417)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	三木　那由他 (Miki Nayuta) (40727088)	大阪大学・文学研究科・講師 (14401)	
研究分担者	和泉　悠 (Izumi Yu) (10769649)	南山大学・人文学部・准教授 (33917)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Tokyo Workshop on Philosophy of Language	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Tokyo Workshop on De Se attitudes	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関